

<実践研究>

[授業研究班]

# 大学教養体育における高大接続についての一考察

— ベースボール型授業におけるレディネステストのトライアル —

北 徹 朗  
森 正 明

## 1. はじめに

学校体育における現行の学習指導要領では、小学校の「ゲーム」ならびに「ボール運動」、中学校・高等学校の「球技」における領域の内容が「〇〇型」といったボールゲームの類型で示されている（図1）。これらは「種目固有の技能ではなく、攻守の特徴（類似性・異質性）や

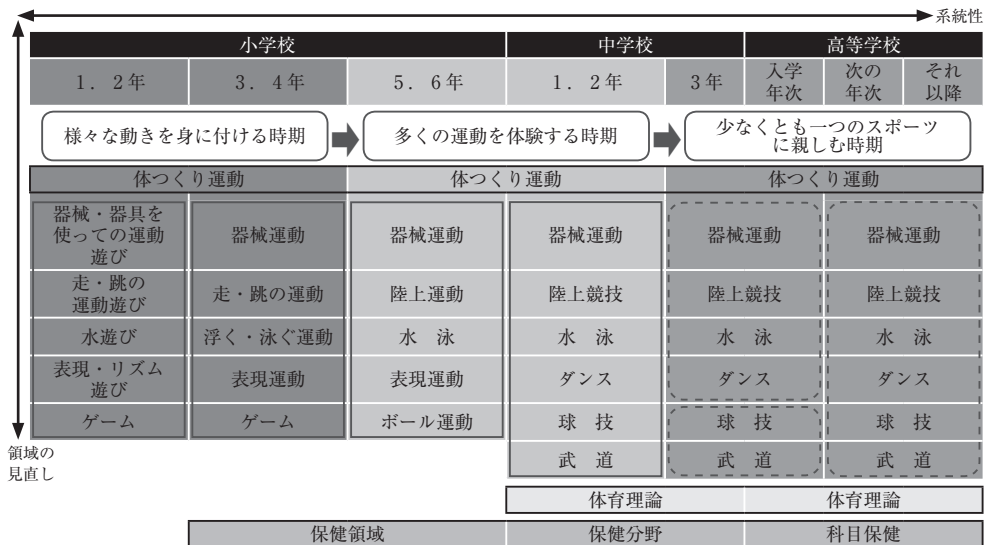


図1 学習指導要領での体育・保健体育分野の指導内容の体系化<sup>1)</sup>

「型」に共通する動きや技能を系統的に身に付ける」という観点から整理・構成されたものとされている<sup>2)</sup>。

高等学校学習指導要領解説には、ボールゲームの種類として「ベースボール型」、「ゴール型」、「ネット型」、「ターゲット型」が示されている<sup>3)</sup>。「ターゲット型」は体育の専門課程を有する高等学校向けの内容であるが、その他の3類型は全ての高等学校において触れられる内容である<sup>4)</sup>。

大学教養体育では、ソフトボールや軟式野球などの「ベースボール型」、バスケットボールやサッカーなどの「ゴール型」、バドミントンやバレーボールなどの「ネット型」のいずれも教材とされることが多い。中でも、北(2010)の調査によれば、「ベースボール型」体育実技は全国の約280の大学体育授業でも実施されていることが明らかにされており、「ソフトボール」や「軟式野球」は小中高そして大学教養体育にまたがる教材として広く扱われていることが明らかにされている<sup>5)</sup>。

学校体育における「ベースボール型」の学習目標をみると、義務教育課程(小中学校)においては、『攻撃側がボールを蹴って行うゲーム』や『止まっているボールを打つゲーム』などから開始することや、『勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、基本的な技能や仲間と連携したゲーム展開ができるようになること』が目標とされている。また、高等学校においては、『基本的なバット操作と走塁での攻撃、ボール操作と定位置での守備などによって攻防を展開すること』が触れられている<sup>6)</sup>。

しかしながら、こうした目標が掲げられてきたにもかかわらず、大学教養体育の「ベースボール型」履修学生をみると、基本的なボールの握り方や簡単なルール、あるいは体育実技に関する基礎用語の理解が乏しいことが多くある。高等学校以前の学習内容であるこれらの事項をあらかじめ理解しているかどうかは、大学教養体育を受講する上で、合理的な運動実践や技能向上という観点のみではなく、怪我予防や安全の観点からも重要である。北ら(2017)はこうした観点を踏まえ「正しい投動作」を学習するためのペットボトルを利用した教材開発などを試みてきた<sup>6)</sup>。

本研究では、より根本的な問題である初年次学生の学習準備状況(知識や技能の習得状況)について検討することを着想した。すなわち、大学初年次における体育実技・演習の教育効果を測定する評価尺度を開発するために、新入生の状況を把握しておく必要があると考え、レディネステストの開発を試みることにした。近年、大学教育のグローバル化が進展し、教育の規格化や国際競争が進むにつれて大学教育の質保証が強く求められ、学生の学修成果の評価に先進各国が取り組んでおり、経済協力開発機構(OECD)も国際調査(AHELOやPIAAC)を行っている。大学教育のユニバーサル化により新入生の資質と経験が多様化している日本におい

でも、学修成果の評価指標開発が大きな課題となっている<sup>7)</sup>。

また、従来指摘されてきた、大学体育への批判の1つとして「高等学校の繰り返し」や「研究水準が低い」ことが挙げられている<sup>8),9)</sup>。図1のように学校体育において段階的に指導されてきたベースボール型の最終段階である大学体育において、何を学習目標とし学ばせるかを再考する観点からも、小中高大学にまたがるベースボール型の体系的・連続性について、さらに検討が加えられるべきであろう。

そこで、体育実技を受講する大学初年次学生における、高等学校までの保健体育学習状況がどの程度であるかを調べ、高大接続あるいは初年次教育の観点からも効果的なレディネステストの開発を目指すための基礎資料を収集することを目的とし「ベースボール型」のクラスの学生を対象に調査を実施した。

## 2. 調査概要

### 2-1. 調査対象と方法

体育実技授業が初年次に必修科目として開講されている東京都内の4年制大学の「ソフトボール」の授業受講者（受講者68名）を対象とした。調査は2017年4月の授業第1回目（オリエンテーション）に実施し、調査の主旨を説明の上、回答に同意した学生を対象とした。

### 2-2. 運動・スポーツおよびボールゲームに関する知識と技能の課題

高等学校で使用されている保健体育教科書では、学習指導要領に基づき、技術・技能や、技術の型に応じた練習、球技の型と戦術の特徴などについて詳しく解説されている。本研究では、大修館書店が発行する教科書である「最新高等保健体育」<sup>10)</sup>および「現代高等保健体育」<sup>11)</sup>、副読本である「ステップアップ高校スポーツ」<sup>12)</sup>および「アクティブスポーツ」<sup>13)</sup>を取り寄せ、内容を確認した。そして、今回は資料収集の手始めとして、下記の設問および課題を課した。

- ① 「技術」と「技能」の違いについて説明しなさい（自由記述）
- ② 「オープンスキル」と「クローズドスキル」の説明文を正しく完成させなさい（語句選択式）
- ③ ボールゲームの4類型について記しなさい（自由記述）
- ④ ソフトボール投手の3投法の名称を記しなさい（自由記述）
- ⑤ ソフトボールの試合のイニング数を回答しなさい（語句選択式）
- ⑥ ソフトボールのフィールドサイズを回答しなさい（語句選択式）
- ⑦ 「正しいソフトボールの握り方」を実演しなさい（個別に教員前での実演）

### 3. 調査結果

#### 3-1. 運動・スポーツに関する知識を問う設問

設問の1つ目に『「技術」と「技能」の違いについて下記にそれぞれ説明しなさい』として、枠内に自由記述により説明させた。その結果、『技術』について正しく回答できたのは8.8%であり、『技能』について正しく回答できたのは16.1%であった。

設問の2つ目の『オープンスキル』と『クローズドスキル』を問う設問では、イタリックで示した下記の文章の途中のカッコ内に、『オープンスキル』と『クローズドスキル』のいずれかの語句を埋めるよう指示した。正答はA:クローズドスキル, B:オープンスキル, であった。なお、この設問の文章は、前述の本研究のために用いられた高等学校教科書(現代高等保健体育(大修館))の内容をそのまま引用した<sup>10)</sup>。

- A. 陸上競技, 水泳, 器械運動などでは, 競争する相手から直接影響を受けることが少なく, 解決すべき課題やそれに対応する技術は大きく変化しません. このように安定した環境のなかで用いられる技術を ( ) と言います.
- B. 球技や武道などのように, たえず変化する状況の中で用いられる技術を ( ) と言います. ただし, どのようなスポーツにもオープンスキルとクローズドスキルの要素が含まれています.

調査の結果, 下記のような正答率となった.

- 正 答 ..... 80.9%
- 不正答 ..... 19.1%

#### 3-2. ボールゲームの種類と特徴についての設問

ボールゲームは, 前述の4つの類型に分類され教科書や副読本にも記載されている. この設問では, その類型(○○型)の名称と, 特徴, 主な種目についての設問を提示した. 調査の結果, 下記の回答率であった.

- 4類型とも正答 ..... 0%
- 3類型のみ正答 ..... 10.2%
- 2類型のみ正答 ..... 10.2%

- 1 類型のみ正答 …………… 17.6%
- 全て不正答 …………… 62.0%

また，4 類型別に正しく回答できた具体的な内容をみると，

- ネット型 …………… 38.2%
- ゴール型 …………… 25.0%
- ベースボール型 …………… 22.0%
- ターゲット型 …………… 0%

であった。

### 3-3. ベースボール型（ソフトボール）の知識と技能の測定

学習指導要領では，ベースボール型として「ソフトボール」が例示されている。高等学校体育実技の副教材「アクティブスポーツ」<sup>13)</sup>や「ステップアップ高校スポーツ」<sup>12)</sup>（ともに大修館書店）などを参考に，特にソフトボールの知識と技能の測定を試みた。

＜ソフトボール投手の3投法について＞

ソフトボールには，「ウインドミル」，「スリングショット」，「エイトフィギュア」の3投法があるが，これら3つを記述させる設問（自由記述）を設けた。その結果，下記の回答率であった。

- 3投法とも正答 …………… 0%
- 2投法のみ正答 …………… 1.4%
- 1投法のみ正答 …………… 22.0%

＜ソフトボール試合のイニング数について＞

ソフトボールのイニング数は7回だが，「5回」・「7回」・「9回」の3択から選択回答をさせた。その結果，下記の回答率であった。

- 正 答 …………… 80.9%
- 不正答 …………… 19.1%

＜ソフトボールフィールドの大きさについて＞

ソフトボールの塁間の長さは野球の約3分の2であり，素早い動きが求められるのが野球と異なる特徴の1つである。この設問では，塁間の長さについて「4分の1」・「3分の2」・「3分の1」の3択から選択回答をさせた。その結果，下記の回答率であった。

- 正 答 …………… 89.8%
- 不正答 …………… 10.2%

<ソフトボールの正しい握り方（学生による実演）>

受講者1人ずつ個別に「正しいと思う握り方」をさせ、指導者がその握り方を評価した。野球やソフトボールにおけるボールの握り方で重要なのは、特に、ボールの中心線に対して、親指が正確に置かれているかどうかである。この評価については、北ら（2017）が【Aタイプ】：ボールの中心線に親指が置かれた正しい握り、【Bタイプ】および【Cタイプ】：親指が中心線からずれている誤った握りを定義し評価している。本稿でもAタイプを正しい握り、BCタイプを誤った握りとして評価した。調査の結果、下記の割合となった。

- 正しい握り ……………30.9%
- 誤った握り ……………69.1%

#### 4. 考察・まとめ

本研究では、大学初年次学生における、高等学校までの保健体育学習状況がどの程度であるかを調べ、高大接続あるいは初年次教育の観点からも効果的なレディネステストの開発を目指すための基礎資料を収集することを目的とした。具体的には高等学校教科書の理解度やベースボール型の基礎技術であるボールの握り方などを調査した。

運動・スポーツに関する知識を問う設問では、技術と技能の違いについて記述（自由記述）させたが、技術については8.8%、技能については16.1%の正答率となった。同じく、オープンスキルとクローズドスキルの用語理解の評価については80.9%が正答であった。しかしながら、この設問は選択式回答であり、技術と技能についても説明文を提示した選択式で回答させた場合、同じような高い回答率が得られた可能性が考えられるため、今後もプレテストで確認しレディネステスト開発における適切な設問提示方法が検討されなければならない。

ボールゲームの種類を問う設問については、4類型とも正答できた者はおらず、3類型正答が10.2%、2類型正答が10.2%、1類型正答が17.6%であった。約6割（62.0%）が1つの類型も回答できておらず、小中高と学習指導要領の「ボールゲーム」や「球技」で学習してきたとはいえ、その枠組みを理解している学生は多いとはいえなかった。具体的には、ネットを挟んで行うバレーボールやバドミントンを指す「ネット型」を正しく回答できた者が38.2%、サッカーやバスケットボールなどの「ゴール型」は25.0%、ソフトボールに代表される「ベースボール型」は22.0%であった。大学教養体育のシラバスや学習目標には、生涯スポーツや健康とともに「スポーツ文化」を理解させる内容が記されていることが多いが、スポーツ（球技）実技は高等学校までに経験していても、分類や枠組みなどについて理解していないことが多い

ことが示唆された。

ベースボール型として行われることの多い「ソフトボール」に関する設問については、インニング数（80.9%）やフィールドサイズ（89.8%）については正答率が高かったが、ボールの握り方については約7割が正しく握ることができなかった（正答率30.9%）。北ら（2017）が指摘<sup>6)</sup>しているように、正しいボールの握りをあらかじめ調査するべき必要性として、『ボールが正しく握られていないため、肘が拳がり難かったりボールが変則的な回転になる場合が多い』ことや『ボールの握りで多い親指が人差し指側に寄ってしまう握り方の場合、手に力が入り過ぎていく場合が多く、肘を肩より上に挙げ難くなる』など、ボールの握りが間違っていると腕の運び方や合理的な動作を阻害する原因にもなり得ることが考えられる。今回の調査で対象とした受講者の多くは、ソフトボールを正しく握ることができておらず、合理的な動作のための握り方を理解していなかった。また、本研究で参照した教科書や副教材には正しい理解を促す説明が不足していることも推察された。

本研究の最終着地点は、大学で体育実技を受講するにあたっての学習準備状況（レディネス）の把握とレディネステストの開発であるが、この観点から取り組まれた研究や報告はみあたらない。本調査では、初年次学生は体育実技に関連する用語の定義について自ら説明できるまでには至らないものの意味自体は理解しており、スポーツ種目の特性・分類の理解が不足していることが多いことが推察された。

今回の実践では、対象者数が少なかったことや、ベースボール型スポーツの経験有無など、分析対象の統制も十分に行われていない。今後もテストの試行を継続し、精度の高い「体育実技授業のレディネステスト」を開発し、大学での体育授業がより良いものとなることを目指したい。そして本研究ではじめて得られた基礎資料をベースとして、種目別レディネステストを開発し、初年次のレディネスから卒業時および卒業後の状況を調べる縦断的研究を行いたい。そして、初年次における体育実技・演習授業における評価尺度のモデル確立を目指したい。

付記：本研究の一部は、日本教育実践学会第20回研究大会（2017年11月26日、於：佛教大学紫野キャンパス）で口頭発表した<sup>7)</sup>。

本研究は、JSPS 科研費 JP16K01079の助成を受けて行った。

#### 参考文献

- 1) 文部科学省（2018）『平成29年度文部科学白書』、「第8章スポーツ立国の実現」、文部科学省ホームページ：[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab201801/detail/1411389.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201801/detail/1411389.htm)（2019年1月3日確認）

- 2) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説 体育編, pp.7-8
- 3) 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編, pp.125-147
- 4) 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編, pp.289-295
- 5) 北 徹朗・山本唯博 (2010) 大学ソフトボール授業に適した視聴覚教材に関する調査, 大学体育学第7号, pp.77-86
- 6) 北 徹朗・森 正明 (2017) ベースボール型におけるペットボトルを用いた投動作のドリルとその効果—大学初年次学生を対象として—, 中央大学保健体育研究所紀要第35号, pp.117-125
- 7) 北 徹朗 (2017) 体育教育における高大接続についての一考察—ベースボール型におけるレディネステストの試行—, 日本教育実践学会第20回研究大会論文集, pp.86-87
- 8) 森田 啓 (2010) 大学における教養教育としての体育と外国語教育—体育と外国語教育の可能性—, 成城イングリッシュモノグラフ第42号 (成城大学大学院文学研究科紀要), p.209
- 9) 篠田邦彦 (2003) あいまいな教養の体育: ディシプリンと教育は誰のために, 何を目指したのか, 体育原理研究第33号, p.107
- 10) 大修館書店 (2012) 最新高等保健体育
- 11) 大修館書店 (2013) 現代高等保健体育
- 12) 大修館書店 (2016) ステップアップ高校スポーツ2016
- 13) 大修館書店 (2016) アクティブスポーツ総合版2016